

STEP 3

テーマごとのエピソードから 保育の可能性を探究する。

「自然保育」「食育」「芸術」というテーマごとに、日常のなかで新たな保育が発想されるエピソードを紹介。

有識者によるQ&Aも交えて、あなたの保育の可能性を探究していきましょう。



自

然

保

育

あなたにとって「自然」とはどのような存在でしょう。

生きる上で欠かすことのできない

空気、水、土、植物、動物たちをはぐくみ、

恵みとして与えてくれる大いなるものを感じるでしょうか。

あるいは、刻々と変化し、つかみどころがなく、

ときに猛威を振るう存在とを感じるかもしれません。

さまざまな顔を持つ自然ですが、

私たちが生きることそのものを支え、

心と体の状態に大きく作用する存在であることは

間違いないでしょう。

ここでは、自然を意識することから

芽生える学び「自然保育」について、

一緒に考えていきましょう。

自然保育で
私たちは何を
はぐくみたいんだらう？



自然は、多様な「いのち」でできている

自然のなかに溢れる数多の生命は、実に多様です。その姿も形もあり様も、ひとつとして同じものはありません。草むらの小さな虫たち、道端の野花、園庭にやってくる鳥たちに関心を向け、それらを好きになることは、私たち人間が異なる「いのち」との関係をつなぎなおすことでもあります。虫の優雅な姿に憧れたり、野花のブローチにワクワクしたり、鳥たちのさえずりに心を癒されたり。いろいろな「いのち」との豊かな関係性は、異なる「いのち」と共に生きる喜びを子どもにもたらしてくれます。

変化し続ける「いのち」の不思議

ときに「センス・オブ・ワンダー」と呼ばれる、自然の不思議を感じ取る感性は、心が動く体験を子どもに与え、人生の原体験を形づくりまします。「いのち」がはぐくまれる不思議さは、そんな感性や原体験をはぐくむきっかけとなります。ひとつの小さなたねが時間をかけて芽吹き、葉を出し、実をつけるプロセスは、子どもにとっては魔法のような驚きに満ちていることでしょう。また、ロボットやゲームのようにスイッチを押さなくても自由に動き回り、息絶えると動かなくなる生きものは、その不思議さと共に、限りある「いのち」の尊さを教えてくれる存在でもあります。時間をかけて変化する姿を見つめ続ける視点は、「いのち」への愛おしさを感じる心をはぐくむことでしょう。

「予測できない」ことから学ぶ

私たち人間は自然をコントロールできません。だから、自然と付き合いおうとするとハプニングが起こります。大事に育ててきた野菜が虫に食べられたり、砂場で一生懸命つくったトンネルが崩れたり。そんな面倒を起こす自然は、現代社会では敬遠されがちかもしれません。一方で予期せぬ事態が手入れや修復といったひと手間を生む機会をつくり、それによって心や力が芽吹くこともあります。試行錯誤を繰り返すことによる科学的思考や、困難をしなやかに乗り越える力も、予期せぬ出来事を通じてはぐくまれることでしょう。たねを蒔いても思い通りに芽は出ず、「まだかなあ……」と待っている時間に、粘り強く待つことを楽しめる心が芽生えてくるかもしれません。自然はいつも私たちと共にあり、豊かに生きるためのエッセンスを用意してくれています。まずは私たち大人が自然との関係を結びなおすが、子どもが自然から学ぶ扉を開きかけとなるはずですよ。

生きもののたまごがあったよ!

①

草むらでたまごをみつけた!

うー! たまごはなんのたまごだろう?



予期せぬ出来事との遭遇は子どもの探究心を大きく育てるチャンス。でもそこにはリスクも。受け入れる覚悟が必要になるかも……。

②

そだってたこ
とって来た!
食べられるのかな?

えー!!
ヘビのたまごだったら
どうするの?!




好奇心は「受容」と「試せる環境」で育ちます。気持ちを否定されずに受け止めてもらえたとき、子どもの自尊感情は大きくはぐくまれます。

③

何のたまごなのかつきとめよう!

ヘビのたまごは
もっと小さい



ウサギはどんなたまご
をうむかな?


仮説を立て、検証し、試行錯誤をすることで新しい知識に出会い、科学的思考の土台となる「考える力」が芽を出していきます。

④

たまごから生まれる生きものはなんだろう?

はちゅう類は? 人間は?

トリは?



「いのち」の探究が不思議さや神秘さを感じる感性をはぐくみ、「生命」が誕生するまでの時間は、「いのち」への愛情や畏敬の念をはぐくみます。

⑤

たまごから「いのち」を
誕生させてみよう!

1st day → 20th day →



やったー!!

ハプニングから始まる子どもの好奇心は、予測不能な出来事を展開させる原動力となります。「計画どおりに進まない」というリスクは、子どもの好奇心をはぐくむことよりも大事なことでしょうか? あなたならハプニングをどう楽しみ、子どもの学びにつなげますか?

たくさんお団子つくったよ!

①

次は変身するお団子
つくってみない?

お団子
つくって!

子どもが興味を持って楽しんでいる活動に新しい視点をうまく組み込んでいくと、新しい探究が主体的にスタートしていきます。

②

みんなが
よく知っている
野菜やお花の
タネ

お団子にいれると
どんな姿に
変身するかな?

普段の遊びに変化を与えることで、やりたい気持ちを後押しできます。たねから生まれる「いのち」の姿を、一緒に想像してみましょう。

③

10種類以上のタネを混ぜてタネ団子をつくらう!

それぞれのタネは
全然ちがう
小生体も

居心地がいい
場所も温度も
ちがう

多様なたねの姿を通して世界の多様性を理解することは、自分らしさへの気づきや他者理解へつながるきっかけになるかもしれません。

④

どちらのタネ団子が
いつどんなタネの芽を出す?

どんな変化があるかな?

自然環境がたねにもたらす変化を見つめる時間が子どもの「観察眼」を養い、発芽を楽しみに待つ時間は「待つ力」を育ててくれるでしょう。

⑤

出てきたのはどんな芽かな?

みんなが芽を出しやすいのは
どんな場所?

自然のなかにある植物や動物の環境適応の話から、自分らしさを知る機会や違いのある仲間との関係性を考える機会をつくってみてもいいかもしれません。「人間も多様な自然の一部」という発想を取り入れて、あなたならどのような学びの機会をつくれますか?

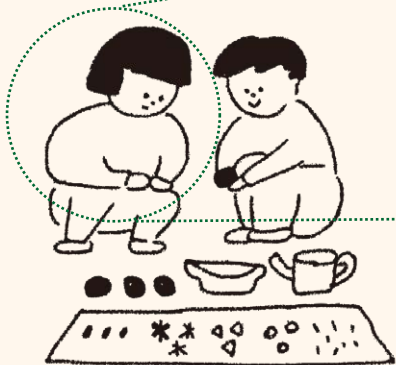
はぐくみ
ズームアップ!

『ひとつの姿』

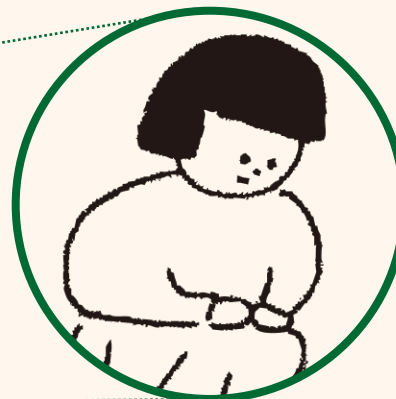
「ひとつの姿」から、その子がどのようなことを感じて何を考えているか、多様な解釈ができます。さまざまな解釈をもってやり取りをしていくなかで、より良い関わり方を探していきましょう。

たくさんお団子つくったよ!

3



ZOOM UP!



「たね団子をつくる」という場面で、活動にうまく参加できずに下を向いている子どもがいました。その姿から、その子がどのような状況にあるのか、可能性を広げて考えてみましょう。

可能性
1

たねをじっくりと
観察している

＝ たねの形に興味・関心が向いている

多少時間がかかっても、次の作業に移るまで促さずに見守ってあげることも大切です。「たねのどんなところがおもしろいと思ったの?」といった問いを投げかけて興味に共感し、探究への情熱を応援してあげるとよいでしょう。

可能性
2

活動がわからず、
下を向いている

＝ 何をしたらいいのか
わからず止まっている

集団のなかでの指示をうまく受け取れずに、今何をすればいいのかわからないまま不安な状態であるかもしれません。「大丈夫?一緒にやろうか」と声をかけて、個別のサポートをしてあげましょう。

可能性
3

何かがあって
落ち込んでいる

＝ 友達ともめて、
やる気をなくしている

活動の前、またはその最中に近くの子と衝突していなかったかを把握して、「気分が乗らないのかな?話を聞こうか」と声をかけ、活動からいったん離れて、何かあったのかを共有する時間を設けてもいいかもしれません。

保育の悩み事、みんなで考えよう！ はぐくみ相談室



一緒に考えてくれた人

岡本 麻友子 さん (おかもと まゆこ)

奈良県出身、一児の母。2010年、「森のようちえんウィズ・ナチュラ」を立ち上げ、親子が育ち合う場づくりをスタート。娘が生まれたことをきっかけに預かり型の保育事業に転換。2019年、「合同会社SOULS」を設立し、自然保育事業のほか、未就園児の親子向けの子育て支援事業、コミュニティカフェやマルシェなどを通じた地域づくり、母親の就労支援や全国の森のようちえんの開園サポートなども行う。「NPO法人森のようちえん全国ネットワーク連盟」副理事長。

お悩み
1



自然の美しさや楽しさに出合った後、
子どもの感動をどのように
表現させてあげるとよいでしょうか？

表情やしぐさで、感動を表現していることも。

子どもにとって、自然のなかには初めて見るものや不思議なものとの出会いがいっぱいです。そこで生まれる驚きや発見、感動は、言葉だけでなく子どもの「表情」そのものに表れていることもよくあります。「表情」には言葉以上に伝わるものがあり、子どもの姿をよく観察してみると、感動を表す場面が、室内遊びや大人が設定した活動時よりも多種多様に存在していることに気づくかもしれません。鳥のさえずりを聞いて歌う子や、木の実から作った絵の具で絵を描く子、昆虫の姿からお話を創作する子も、自然から感じたことを「自分のやりたい方法」で生き生きと表現しているのだと思います。

生物学者レイチェル・カーソンは、著書『センス・オブ・ワンダー』で“生まれつきそなわっている子どもの「センス・オブ・ワンダー」をいつまでも新鮮に保ち続けるためには、私たちが住んでいる世界のよこび、感激、神秘などを子どもと一緒に再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、すくなくとも一人、そばにいる必要があります”と述べています。テーマを決めた表現活動も大切ですが、自然と触れ合う子どものしぐさや表情を大切に受け取り、感動を分かち合うことが、「心の芽」をはぐくむことにつながると信じて実践してみてくださいね。

お悩み
2



園庭に草木や花が少なく、虫もあまりいません。
限られた環境で自然に触れる機会を増やせる工夫、
活動の増やし方を教えてください。

外で絵本を読むことも、自然に触れる機会になります。

草木や虫などと触れ合うことだけが自然保育ではありません。保育室から園庭に出してお絵描きをしたり、給食を外で食べながら太陽の温かさや風の心地よさを感じたりすることからでもよいと思います。「自然保育を取り入れる・活動を増やす」という感覚ではなく、「室内でやっている活動を、園庭や野外でやってみる」ということから始めてみてはどうでしょうか？

お絵描きでは、画用紙に塗った絵の具の青と空の色が似ていることに気づいたり、絵を描く過程で草花から色を作ることに興味を持ったりと、心が揺れる体験が生まれるかもしれません。保育者が自然物を事前に用意するといった環境の設定だけではなく、園庭やお散歩の道中にある花の香りや葉っぱの手触り、空の色や風の音などを、子どもと一緒に感じてみてください。それを振り返りの時間にみんなでシェアすることで、同じ風景のなかにも多様な体験や感じ方があったことを、子ども同士が知るのもおもしろいと思います。

また、園庭に「青空ライブラリーコーナー」を作って、自然がテーマの絵本を並べてみるのもアイデアのひとつです。絵本に登場する虫や植物がどのような場所に生息しているのか想像を膨らまし、園庭や近くで見つからないようなら、子どもが興味を持った時点で植物や虫に触れる体験を用意する、というのもよいかもしれません。あくまで子どもから興味・関心が出てきたときに、子どもと一緒に、どんな体験や環境設定があればよいかを考えてみる。自然保育にやり方や正解はありません。目の前にいる子どもと保育者が、共に主体の自然保育のカタチを見つけてみてくださいね。



お悩み
3



昆虫や生きものの飼育が難しいです。
いのちを大切に育てる気持ちと、
環境の整え方に悩んでいます。

子どものチャレンジを根気よく見守って。

生きものを飼育することにハードルの高さを感じている保育者は少なくないと思います。たとえば当園では、虫を捕まえると「飼うのか／観察して逃がすのか」を、子どもが考えて決めています。スタッフや保護者は、まずは子どもの気持ちに寄り添い、その後どうしていくのか一緒に考えます。正解を与えるのではなく、共に考え、子どもの試行錯誤をサポートします。いわば子どもが決めたことを「最小限のサポートで、最大限に見守る」スタイルです。エサはちゃんとやれるのか、自分が関与して死なせてしまったら子どもは傷つかないかなど、不安で一歩を踏み出せないこともあるかもしれませんが、ですが保育者主導ではなく、子ども主体のチャレンジを根気よくサポートすることに注力してみてください。ときには死なせてしまうこともあります。そこに至るまでのプロセスを個人や全員で振り返り、次はどうか、どうしたいかを前向きに見つめます。それぞれの思いを共有し、次の機会につなげる。その後もトライ&エラーを繰り返すなかで、私たちも含めた一人ひとりが「いのちの尊さ」と向き合っていきます。「死なせてしまうのは悪いこと。飼育のルールを守る」を学ぶのではなく、「いのちと向き合う」ことの本質に触れるチャンスにしていきたいですね。うまくいくことをゴールにせず、失敗もみんなで乗り越えていきましょう!

お悩み
4



職員によって自然への興味・関心の差が大きいです。虫が苦手な職員が年々増えるなかで、子どもにどんな体験をさせてあげられるでしょうか?

得意な人を探すなど、アプローチ方法を変えてみては?

実は私も虫は得意ではありません(笑)。でも「虫が好きにならなくちゃ」とは思っておらず、幸いスタッフに「虫博士」がいるため、虫のことなら喜んで対応してくれています。子どもに対しても同じで、嫌いなものを無理に好きにならなくていいし、それは不自然な気がしています。確かに「虫好きな子どもの興味・関心に寄り添いたいの」に、虫が苦手な深く関われない」という保育者の声はよく聞きます。とても素敵な保育者さんですね。ただ、苦手意識を克服しようとしても、生理的に拒否感が強い場合は、意図せずネガティブな反応を子どもに返してしまうことにもなりかねません。無理はせず、虫が好きな人や詳しい人が周りにいないか探してみましょう。



園内だけでなく、地域の方や保護者などにも協力してもらい、身近な虫博士からしてもらう話のほうが、みんなきっと楽しくワクワクするのではないかと思います。また虫好きの子どもが虫博士になって、その魅力をほかの子に伝える場を設けるだけでも、子ども同士が体験を共有できる機会になります。「自分で直接アプローチする」という前提をいったん横に置いてみて、関わってくれる人の輪を広げたり、アプローチ方法を変えたりして、虫との接点を子どもに届ける工夫をしてみてくださいね。

写真提供: 森のようちえんウイズ・ナチュラ

あなたの町にも
きつといる
自然保育の
パートナー



農家さん

野菜やお米を作っている農家さんは、田畑で活動したい場合の力になってくれる存在。栽培・収穫サポートしてもらえないか、ぜひ声をかけてみましょう。



博物館・科学館の人

自然博物館や科学館には、学芸員という立場で植物や動物に関する専門的な知識を持った専門家が常駐している可能性が高いので、ヘルプをお願いしてみましょう。



生物の先生

地元の中学校や高校の先生のなかに、生きもののが大好きで、知識もスキルも豊富に持っているような専門家がいないか、探してみるといいかもしれません。